命を育むことについて考える妊婦体験を取り入れた授業実践

－当事者の語りと体験活動を通した中学生の他者理解と共感意識の形成に着目して－

Classroom Practices Incorporating a Pregnancy Simulation to Reflect on the Process of Nurturing

○笹谷絵里[1)]・宜保由紀[2)]

Eri SASATANI, Yuki GIBO

[1)] 特定非営利活動法人社会理論・動態研究所 [2)] 沖縄アミークスインターナショナル

[1)] Institute of Social Theory and Dynamics [2)] Okinawa AMICUS International

Key words:妊娠, 出産,参加型授業, 家庭科

研究の背景と目的

思春期は、身体的・精神的な発達に伴い、性や生殖、妊娠・出産について正しく理解するとともに、自分自身の生き方や他者との関係性について考える重要な時期である。妊娠や出産について学ぶことは、生命の誕生や命の尊さについて理解を深めるだけでなく、妊娠する人の身体的・心理的な変化や、周囲の人々に求められる配慮について考える機会にもなる。

しかし、妊娠中の身体的な負担や心理的な変化は、実際に経験していない者にとって具体的に想像することが難しい。また、妊婦が日常生活の中で感じる不便さや不安、周囲からの支援の必要性についても、知識だけでは十分に理解できない場合がある。そのため、妊娠・出産に関する知識を習得するだけでなく、実際に妊娠を経験した当事者の語りを聞き、妊婦体験を通してその立場を想像する学習機会が必要であると考える。

そこで本実践では、中学3年生を対象に、妊娠・出産を経験した当事者による妊婦時代の体験談と、妊婦体験を組み合わせた授業を実施する。妊娠中の身体的・心理的な変化や当事者の思いについて理解を深めるとともに、妊婦体験を通して妊婦の立場や日常生活における困難を想像し、妊婦に対する配慮や支援について考えることを目的とする。さらに、これらの学習活動を通して、他者の置かれた状況を理解し、相手の立場に立って考える意識や、他者への共感意識の形成について検討する。

実践の概要と方法

対象は中学3年生32名（2クラス、各16名）である。家庭科「私たちの成長と家族・地域」の単元に位置づけて授業を実施する。

講話・体験活動に先立つ事前学習では、各クラス3時間を設定し、幼児の身体的・精神的発達、命の誕生、妊娠・出産、性と生殖について学習する。具体的には、幼児の発達段階について調べ学習を行い、自分自身の幼少期について家族にインタビューする活動を取り入れる。また、命の誕生や成長について学ぶことで、自分自身の成長と家族との関わりについて考える機会を設ける。

事前学習後の講話・体験活動では、まず、妊娠・出産を経験した当事者から、妊婦時代の体験について話を聞く。妊娠中の身体的な変化や日常生活で感じた不便さ、心理的な変化、不安や喜び、周囲の人々との関わりなどについて、実体験に基づく話を聞くことで、妊娠中の生活や当事者の思いについて具体的に理解することを目指す。

次に、生徒をグループに分け、妊婦体験を実施する。妊婦体験用の教材を活用し、妊娠中の身体の状態を模擬的に体験することで、身体の重さや動作の制限など、日常生活における不便さや困難について考える。体験後はグループごとに、妊婦体験を通して気づいたことや感じたこと、妊婦の立場になって考えたこと、妊婦に対して自分たちにできる配慮や支援について話し合い、ワークシートにまとめる。

評価資料として、生徒が記入したワークシートを収集する。これらの記述を質的に分析し、当事者の語りと妊婦体験を通して、生徒が妊娠中の身体的・心理的な変化や妊婦の置かれた状況をどのように捉えたか、また、妊婦への配慮や支援についてどのような考えを示したかを検討する。

まとめ

本実践は、妊娠・出産を経験した当事者の語りと妊婦体験を組み合わせることで、中学生が妊娠中の身体的・心理的な変化や、妊婦の日常生活における困難について具体的に考えることを目指したものである。当事者の実体験を聞くことによって妊婦の思いや経験に触れ、さらに妊婦体験を通して自らの身体感覚を伴いながら妊婦の立場を想像することは、他者の状況や思いを理解するための一つの機会になると考える。

今後は、授業で得られた生徒の記述を分析し、当事者の語りと妊婦体験が、中学生の他者理解や他者への共感意識の形成にどのようにつながるのかを明らかにするとともに、命を育むことについて考える教育実践としての意義と課題を検討したい。